

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 現代朝鮮語における比況表現について (2) : tasip' i |
| Author(s) | 深見, 兼孝 |
| Citation | ニダバ , 15 : 38 - 42 |
| Issue Date | 1986-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047174 |
| Right | |
| Relation | |



現代朝鮮語における比況表現について (2)

— tasip‘i —

深 見 兼 孝

はじめに

tasip‘iは主として動詞の語幹に付くが¹、大まかに言って二つの用法を持つ²ようである。次の例を見られたい。

1 po tasip‘i wančönhata.³
みる ある かんぜんだ

2 apöcinün kü hönhan sankilül hwihwi nal tasip‘i
ちちは その けむしい やまみちを ひぶんひぶん とよ
kölssta. (全商團「脈」)
あるいた

この二例のうち、比況表現の文と言えるのは2である。2では、apöci ‘父’のköl- ‘歩く’さまがnal- ‘飛ぶ’さまに喩えられているのである。一方、1は「見てのとおり完全だ。」といった意味で、何か wančönha- ‘完全’なさまがpo- ‘見る’さまに喩えられているのではないので、この文を比況表現の文と言うことはできない。本小稿では、2のような比況表現の文に用いられる tasip‘i に限って、それが用いられる条件について考えてみることにする⁴。

1 主語との関係

tasip‘i は節も句も導くことができるが、節の場合はその節の主語、句の場合は(多くの場合、文全体の主語と同じであるが)その句内の動詞の意味上の主語に、無生物を表わす名詞が来ることはないようである。次の例を見られたい。

3 *yönkika ki tasip‘i mit‘patakül hülöko issta.
けむりが はう そのまを ながれて いる

4 ?palo kwiscönulo hülü tasip‘i yolanhatön tolangmul
ちよとど みおもとへ ながれる おおきかつた みぞ

solika mölöcyö kassta.
おとが とおくなって いった

5 kulöngika nal tasip'i kiö oko issössta.
 へびが とよ はって きて いた

上の例はいずれもtasip'iが句を導いている例であるが、その句内の動詞の意味上の主語は、3がyönki 'けむり'、4がtolangmul soli '溝の音'、5がkulöngi 'へび'である。これらのうち、有性物を表わすのは5のkulöngi 'へび'で、この5が受け入れ可能な文なのである。

3のtasip'iが導く句内の動詞ki- 'はう'は、本来動作動詞であろうと思われるが、無生物を表わす名詞yönki 'けむり'が主語である、この3が三例中もっとも受け入れがたい。tasip'iは(抽象物を含め)物を人に喩える擬人法には用いられないのであろう。

ところで、tasip'iの導く節の主語、または句の意味上の主語が無生物を表わさないということは、必ずしもその節、または句の動詞が動作動詞でなくてはならないということの意味しない。次の例を見られたい。

6 künün çule mukkyösö kküllyö ka tasip'i ötum soke
 かねは ひもに しぼられて ひかれて いく やみ なかに
 salačyö pölyössta.
 きて しまった

7 nanün hömulöci tasip'i kü çalie çučöančassta.
 わたしは くずれる その はへ すわりこんだ

6、7とも受け入れ可能な文であるが、前者のküllyö ka- '引かれて行く'、後者のhömulöci- 'くずれる'は動作動詞とは言えない。なぜなら、これらはそれぞれの主語kü '彼'、na '私'の意志によって起こる事柄を表わしてはいないからである。

2 tasip'iが結合した動詞の表わす事柄と、文末の動詞が表わす事柄の時間的關係

現代朝鮮語では、文末の動詞が文(単文の場合)または主節(複文の場合)の述部の主要構成要素のひとつである。tasip'iが結合した動詞の表わす事柄と、文末の動詞が表わす事柄は、時間的に同時と考えられる。つまり、tasip'iを含む文の表現意図は、文末の動詞が表わす事柄を、それと同時に発現していると仮定される事柄に喩える、というものである。次の例文を見られたい。

8 * kü yöçaka çökölilül pösö hüntülimyö mič'i tasip'i
 その おんなが チョゴリを ぬいで ふりながら くるう
 akül ssössta.
 あらんかざりのこたでまけんだ

16 Ukün kulü tasip'i tomangč'yössta.
 ウクは ころがる につた

17 künün yongsölato pil tasip'i mäköpsnün moksolilo ipül
 かねは ゆるしても こつ ちからのない こと くらま
 yölssta.
 ひらいた

3 tasip'iが結合する動詞のアスペクト的性格
 次の例文を見られたい。

18 * künün öñčena čamtülö iss tasip'i kwamukhata.
 かねは いつも ねむって いる ものしずかだ

19 * künjöči čamtün ölkulün mač'i čukö iss tasip'i
 かねじよの ねむった かおは あたかも しんで いる
 poyössta.
 あえた

20 * sanaiüi sonül ppulič'iko mič'yö iss tasip'i tallyö
 おとこの てま ぶりきって くらって いる はしって
 kassta.
 いった

上の3例において、tasip'iが結合している動詞はいずれも-*iss*-によって状態相を表わしている⁶が、受け入れられない。おそらく、tasip'iは状態相を表わす動詞とは結合しないのであろう。先に挙げた受け入れ可能な例文2、5～7、14～17において、tasip'iが結合している動詞は状態を表わしてはいない。

おわりに

以上tasip'iを含む文が成立する条件を考察してきたが、それらが相互にどのような関係にあるのかという核心的問題には今回触れることができなかった。また、これらの条件だけでは処理しきれない事象が存在することも率直に認めておこう。前回と今回の調査から、現代朝鮮語の比況表現文は、それを明示する要素の違いによって微妙なニュアンスの差を生み出しているものと推察されるが、その詳細の解明と併せ、今後の研究に期したい。

